

# Pater のギリシア神話論と 19 世紀古典学の新方向

舟川一彦

この研究発表は、ウォルター・ペイターが 1875 年から 78 年にかけて書いたギリシア神話をめぐる 4 篇のエッセイ——“The Myth of Demeter and Persephone I”および“II”、“A Study of Dionysus: The Spiritual Form of Fire and Dew”、そして“The Bacchanals of Euripides”——について、①エッセイのテキストそのもの、②ペイターを取り巻く人間関係、そして③イギリス思想界および出版界の動向、という 3 つのレベルの材料をひとつの視野に入れて考察しようとする試みである。

## ペイター神話論の動機

最終的に死後出版の *Greek Studies* (1895) に収録されることになるこれら 4 篇のうち、デーメーテル神話についての 2 篇はもともと Birmingham and Midland Institute という市民向けの教育機関で行なった講義を *Fortnightly Review* に掲載したものであり、“A Study of Dionysus”も *Fortnightly* に発表したものだった。“The Bacchanals of Euripides”も同じ雑誌に掲載するつもりでこれら 3 篇のすぐ後に書かれたと推測されるが、何らかの事情で執筆から 10 年以上経って *Macmillan's Magazine* に掲載された。

ペイターがこれら一連のエッセイを発表した動機を、われわれは“The Bacchanals of Euripides”の冒頭近くの一節から窺い知ることができる。ディオニュソス信仰についてのエウリピデスのコメンタリーともいえるべき悲劇『バックスの信女』をペイターは、人生の終焉を目前にしてエウリピデスが陥っていた不安——〈生前の功德が足りなかったのではないか〉という不安——の産物として解釈しようとする。この悲劇は、長らく世の善男善女の宗教心を軽んじ揶揄してきた懐疑主義者エウリピデスが晩年に至って行なった「世間との和解」の試みである、そしてそのために彼が採った方針は、一方で正統的宗教に戦略的に屈服し「従順」になること、他方で神話を精練（リファイン、精緻に解釈し合理化）することだったとペイターは言う。

この一節に読者は、ペイター自身が 1870 年代にディオニュソス神話やデーメーテル神話について語った動機を重ねて読み取らないわけには行かない。1873 年に *The Renaissance* の初版を出版した直後から、彼は一方で（「結語」における「反宗教的」な人生観の表明ゆえに）国教会正統派の面々から白い目を向けられ、もう一方で（同性愛にかかわる彼自身の行状ゆえに）オクスフォード大学内の最有力者の一人であるベンジャミン・ジャウエットの不興を買っていた。その状況の中で、彼が晩年のエウリピデスと同じく「世間との和解」を求める心境にあったことは想像に難くない。彼はジャウエットら学内支配者に恭順の意を表すために、1875 年以後、古典教師として大学の教育方針に忠実に沿って（特にジャウエットが重視したプラトンの『国家』についての）講義のノルマを着実に、「従順」にこなした。その一方でペイターには、教会当局に向けて自分の立場がキリスト教と相容れないものでないことを示す必要があった。そのために彼は、正統的宗教を正面から否定するのではなく、合理的な言葉で通俗宗教の迷信的部分（神話）に「解釈」を施すことによって宗教の発生プロセスについてのより洗練された理論を作り上げようとする。キリスト教も視野に入れたそのような理論化の作業を行うために、オクスフォードで「古典人文学」の名の下に制度化されていた伝統的な文献学的アプローチと一線を画する、過去の文化に対する新しいアプローチを模索することが彼の課題となった。

## ヴィクトリア朝オーソドクシーへの離反

当時のオクスフォードの古典人文学教育は、学位試験の性質上、課題書として与えられた何冊かの書物を精読し、「従順」に学習することを学生に要求していた。これに対してペイターが自らの神話論の後ろ盾として利用しようとしたのは、比較言語学、比較宗教学、人類学、考古学など、当時の大学ではほとんど知られていない発見的科学の態度を必要とするアプローチだった。こうした「科学的」アプローチを援用して彼がギリシア宗教の古層から明るみに出したのは、原始性、非理性、暗さ、おぞましさ、恐怖や悲しみ、そして手に負えない暴力性という要素である。ギリシア文化の中にこうした要素の存在を指摘することは、ヴィクトリア朝中期のイギリスの思想界で幅を利かせていたいくつかの常識的観念にはからずとも異議を申し立てることにほかならなかった。

第一に、これはヴィンケルマンからマシュー・アーノルド等のヴィクトリア朝思想家たちに受け継がれた、明朗そのもののギリシア人および神々のイメージからの逸脱だった。第二に、ギリシア宗教の根底にある非理性的な要素を指摘することは、ヴィクトリア朝におけるもうひとつの正統思想であったベンサム派の功利主義に基づく合理主義的なギリシア観に基づく神話論（その代表的な表現はジョージ・グロートの *History of Greece*

第一巻 (1846) にある) にも逆行していた。第三に、ペイターがギリシア宗教の中に見出した狂気じみた性質は、オクスフォードの「従順」な古典教師としての彼自身の仕事の成果である *Plato and Platonism* (1893) で彼がプラトンやラクダイモンの宗教に見出す「晴れやかな真昼の光のような」精神や「正気の宗教」とは正反対の要素である。ギリシア宗教の中のそうした要素の存在を裏づけるためにペイターが頼りにしたのが、人類学や考古学といった新興科学だった。

しかし、ギリシア宗教や文化の古層を掘り起こすにあたってのペイターの意図と、同時代また後の世代のプロの人類学者たちのそれとの間にも、意味深い差異があった。人類学者を含め近代主義の思想家たちがギリシア宗教の原始性を指摘したのは、迷妄に満ちた過去を否定し、理性と科学的認識を拡張させた近代文明を肯定するためだった。それに対し、ペイターの理論は、神話の中にある原始の名残を排除するというよりはむしろ、そうした要素が文明化された近代社会や、より洗練された宗教であるキリスト教の中にも残っていることを再認識するためのものであり、それが近代人の精神に生産的な作用を及ぼすであろうという期待を含んでいる。初期の神話に関する神話学者や人類学者の関心が、神話という非科学的な、誤った思考がどのように生み出されたのかという一点にあったのに対して、ペイターの関心は、それと同等かあるいはそれ以上に、神話が何を—どのような詩や藝術を—生み出しているのかにあったと言えるだろう。

### 『フォートナイトリー・リヴュー』とモーリー人脈

ペイターのギリシア神話論は、上に見たように、ヴィクトリア時代における古典学の展開の中で、さらには当時の思想界全般の中で、「世間との和解」という意図と裏腹に彼をあらゆる意味でのオーソドクシーから離反させ、革命的とも言える位置に置くことになった。が、神話についての一連の考察が彼の身上にもたらしたものはそれだけではなかった。それは現実政治の文脈においても彼を過激な反体制勢力に近づけることになったのである。

彼がデーメーテル神話についての2回の講義を行なった Birmingham and Midland Institute は、バーミンガムの非国教勢力のリーダー的な立場にあった面々が 1854 年に創設し、運営を担っていた施設だった。ここでペイターは勝手知ったるオクスフォード大学の講義室を離れて、一見 (いちげん) の聴衆に向けて初めて語りかけたのだった。神話論4篇のうち3篇が掲載されたのは、上述したように *Fortnightly Review* の誌上だったが、この雑誌は、19世紀前半に創刊された三大書評誌と意識的に一線を画する編集方針を掲げ、当時のイギリスで最も革新的なメディアと目されていた。三大書評誌のひとつとして十分なprestigeのあった *Westminster Review* ですでに言論出版界へのデビューを果たしていたペイターを *Fortnightly* の寄稿者としてリクルートし、一流のペリオディカル・ライターに育てたのは、自由思想家であり国教会と聖職者組織に激しい敵意を示したジャーナリストで、反体制派の活動家でもあったジョン・モーリーだったことは疑いの余地がない。(ペイターが *Fortnightly* の常連寄稿者であった期間は、モーリーが二代目編集長としてこの雑誌を預かっていた期間にぴったり収まる。) モーリーはまた、ペイターがバーミンガムに講師として招聘されたちょうどその時期に、同市の非国教徒人脈に連なる人々ときわめて深い親交を持ち、くだんの *Institute* の名誉校長を務めたりもしていた。

大学ではなく市民講座で講義し、モーリーの雑誌に寄稿するという選択は、ペイターの神話論の内容と未だ公認されざる人類学的方法論からして自然なものだった。が、この選択は必然的に彼を過激で反権力的な非国教徒人脈のネットワークに接触させることになり、アカデミアの保護から彼を遠ざけてしまうリスクをも孕んでいたはずである。この人脈は、当時のイギリスの人文主義的ヘレニズムの主流派 (例えばアーノルド) に言わせれば、無秩序 (anarchy) という社会状態を助長しかねない勢力にほかならなかった。この接触がペイターに何をもたらしたのかについては、現在われわれが利用できる資料から確たる判断を下す根拠が得られない。これまでに出版された彼の主要な伝記は、モーリーや政治・宗教的ラディカル勢力、特に非国教徒人脈とのつながりについてあまり多くのことを明かしていないからだ。もしこのトピックについてもっと掘り下げて語るための何らかの材料があるか、あるいは今後出てくることがあれば大変興味深いことである。

この発表で考察した4篇のテキストは、その内容と、発表の媒体と、当時のペイターを取り巻く人間関係の中で彼が直面していた一身上の問題とが緊密に絡み合う場を形成していた。古代ギリシアについて語ることは、ヴィクトリア朝の知識人にとって、現在の自分自身の政治的・宗教的・文化的位置取りを探り、測る作業でもあったと言えるだろう。